

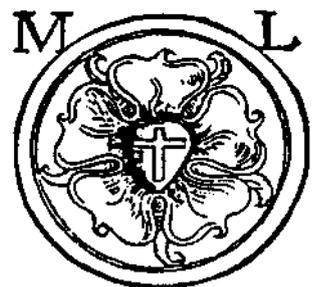


ルーカス・クラナッハ（子）、1546年〔部分〕

# ルター 新聞

# Die Luther Zeitungs

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所二ニュース・Nr.76



## ルターと説教

コロナの時代の中で  
考える

コロナ感染が止まらない。去年の春、まさかこの事態が一年以上続くとは、誰も思っていなかった。今、いろいろな不自由でも、やがて元にもどると思っていた。甘い見通しだった。礼拝も今は何かと不自由でも、やがて元にもどると期待していた。しかし、甘い見通しだった。

さて、そうした中、だからこそ、信仰の原点を改めてしっかり見つめたい。落ちついて自らを省みたい。神がそのための時間を与えて下さっているのではなからうか。

信仰の原点は、神様からの語りかけ（神の言葉）である。ルターは、その神の言葉が、毎日曜日の礼拝の只中で届けられると語っている。「説教」である。毎日曜日、牧師が語る「説教」である。会衆が聞いている「説教」である。

「説教」とは何か。コロナ禍だからこそ、改めて本気で「説教」について考えてみたい。

(三え)

### 今号の内容

- 2面 「コロナ禍の「説教」の課題
- 3面 説教とは何か  
～ルターと共に考える
- 4面 シリーズ「人間ルター」⑭  
～説教する人ルター  
ルターの名著  
～「山上の教え」による説教
- 5面 コロナ禍における福祉、臨床  
心理、教会  
～合同勉強会報告
- 6面 ヘルダーの言語思想  
「ルター研究」一七巻紹介
- 7面 ルターのことば  
切手に見るルター②
- 8面 「ルターとバツハ」研究はじまる  
研究所二ニュース

## 「コロナ禍の「説教」の課題」

### コロナ禍での礼拝

岡田 薫

### コロナ禍での説教の難しさ

所員 高村 敏浩

コロナ禍にあつて、あらためてこの一年の生活を振り返ってみました。私が遣わされている北海道の道東地区はこの数年の間に二つの教会を閉じ、現在は礼拝堂と牧師館のある帯広で主日毎に礼拝が行われ、釧路と浦幌ではそれぞれ月に一度のペースで家庭集会和会場を借りての礼拝が行われています。

当初、感染症の影響は都会ほど顕著にみられるものではありませんでしたが、昨年の二月末に知事からの要請という形で、道内ではいち早く札幌などに大都市圏への移動の制限や自粛が求められるようになり、人々の間には漠然とした不安が浸透してゆきました。また、高齢者施設や介護関係の職にある信徒の中には礼拝出席が実質禁止になる方ができたり、更に施設に入居されている方の行動の自由も奪われる事態となりました。



三月初めの臨時役員会ではできる限りの感染症対策を行いつつ、いつも通りの礼拝を継続する“ことを確認し、同時にさ

まざまな制限を受けておられる方や不安を感じておられる方々がそれぞれの場にあつても礼拝（祈り）が行えるように資料を作成しお届けすることにしました。これは現在も継続して行われています。

この話し合いの中で、ある方が「道東地区では帯広以外の方は、今までも毎週礼拝ができていたわけではなかった」とつぶやいたことが、今でも忘れられませんが、今でも私たちがどこかで主日毎に礼拝の恵みに与ることが当たり前だと考えていたのですが、実態がそうではなく、そうしたことがあちこちで起こっていたことにあらためて気づき、改めて他人事ではなく自分事として考えるようになったからです。“一堂に会することができない難しい状況は、コロナ禍以前から北海道の私たちの日常だった”のです。そのような中にあつて説教者として心がけていることは、どのような状況の中にあつても、私たちは共に主の御名を呼び求め、祈り、賛美し感謝する群れであり、今ここにある恵み、主が私たちと共におられるという幸いをわかちあひ伝える者でありたい、ということでした。

(JELC 帯広教会 牧師)

緊急事態宣言が発令され、不要不急な外出の自粛要請があつたとき、教会として礼拝は不要不急ではないことを確認し、しかし隣人への責任と配慮から礼拝を休止することとした。家庭で礼拝や祈りのときを持てるようになると、礼拝式文や説教原稿の郵送や配信を行うと同時に、以前から考えていた説教音声の配信も、礼拝休止後すぐに、教会員のおかげで前倒しで実行に移すことができた。

説教の音声配信は、もともととは日曜日に仕事などのために礼拝に来られない教会員が、その週のどこかで説教を聞き主日を守ることができるようにと意図していたものであり、礼拝の中で録音したものを利用することを想定していた。しかしコロナ禍では、郵送や添付ファイルでの配信、HPからの音声配信はどれも、感染拡大防止や感染から身を守るため日曜日在家で過ごす人たちを念頭に置き、その前に届くように準備するようにし、今も続けている。

日曜日に間に合うように説教を準備するためには、遅くとも木曜日までに説教原稿を仕上げ、土曜日までに録音しなければならぬ。毎週、誰もいない礼



拝堂の説教台で、日曜日前に説教を吹き込む。礼拝があれば会衆の前で説教をするが、礼拝が休止のときは会衆不在で語られた音源が説教となる。神学校で説教は礼拝の中、会衆に聞かれて完成すると学び、按手後もそう信じて続けてきたが、説教の、また説教者としての「当たり前」はコロナ禍で崩れて行くように感じる。

日曜日に礼拝を守れるようにと事前に準備して届ける説教は、会衆のための牧会的決断であり、コロナ禍という特殊な状況の中で正しいことであると思う。そして確かに、たとえば目の前にいなくても会衆はいて、説教を聞いているのだらう。しかしその事実と、自分が学んできたこと、また経験していることがうまく結びつかないところに、コロナ禍にあつて説教をすることの難しさを感じている。

(JELC 三鷹教会 牧師)

# 説教とは何か

## ルターと共に考える

所長 江口 再起



礼拝で牧師が説教を語る。それを私たち会衆が聞く。ありふれた説教風景だが、ここに全てがある。ルターはこう語る。《私は説教を聞く。一体誰が語っているのか。牧師か。そうではない。なるほど声は、牧師の声である。が、神こそがそこで説教をし、み言葉を語られるのである》(一五四〇年の説教、WA四七)。

神が語る。それが「神の言葉」である。神の言葉、もう耳にタコができるほど聞き慣れた言葉だ。だが改めて問う、神の言葉とは何か。まず「言葉」とは何か。言葉を最初に口にしたのは神である。「光あれ」。こうして天地創造が行われた。言葉のことを旧約のヘブライ語でダーバルという。ふつう言葉は伝達(コミュニケーション)の道具と考えられるが、ダーバルはそれ以上である。伝達だけでなく、伝達した事が実際現実化するのである。神が「光あれ」と言えば、光が出現したのである。このダーバルを新約のギリシア語ではロゴスと翻訳した。こう書いてある。《初めに言葉(ロゴス)があった。言葉は肉となって私たちの間に宿られた》(ヨハネ一・一〜一四)。ロゴスには

理性という語感もあり、ダーバルの全てを含みきれないが、ともかく神の言葉とはイエス・キリストのことである。そしてそのキリストとは、神の心を伝達するのみならず、まさに神を体現したのである(受肉!)。つまり神の言葉は伝達した事を本当に実現する。人の言葉とはちがう。ルターは言う。《人の言葉はただ指し示すもの、しるしである。だが神の言葉はしるしでなく、神の存在そのものである》(一五二三年の説教、WA一〇二)。すなわち神の言葉とは、そこに神が私たち会衆の前に立ち現われ、語りかけている、その言葉だ。つまり「説教」とは、まさにそういう時なのである。居眠りなどしている場合ではない。《聞く耳のある者は聞くがよい》(マルコ四・九)。

礼拝の説教の只中で、神ご自身が牧師の口を通して語っている。それゆえ一六世紀の改革派神学者プリンガーはこう語る。《神の言葉の説教が、神の言葉である》(第二イス信条)。神の言葉を聞くために瞑想など特別なことをしなくてもよい。説教を聞けばよいのである。あるいはパウロの場合。意外にも実

はパウロは口べただった。《実際に会ってみると話はずまらない》(第二コリ一〇・一〇)。しかしそのパウロがこう語る。《私たちから神の言葉を聞いた時、あなた方はそれを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れてくれた。事実それは神の言葉であり、信じているあなた方の中に現に働いている》(第一テサ二・一三)。

もう一度、確認しよう。説教とは神の言葉である。それに尽きる。さて、そうなるに語る牧師も、聞く会衆も覚悟が必要。いい加減なことではない。私は説教を語ることもあれば、会衆として聞くこともある。それゆえ自戒をこめて言うが、まず説教者。説教に、街角やテレビなどで耳にするような笑いを誘う気のきいた話題や、相田みつをでも言いそうなちよつとイイ話やほっこりする話などいらない。イエスがそんなトンチ話や小細工などするわけがない。ましてや自分の体験談や信念や自慢話など、説教には全く不要である。一にも二にも、聖書、聖書、聖書。聖書の内容を語るべきである。イエス・キリストのことに集中し、

聖書の説き明かし(再話)をすべきである(そのために時には自らの貧しい体験談も少しはゆるされようが...)。とは言え、なかなかそうはできないという声が説教者から聞こえてきそう。だが、ルターは結構きびしい。《説教は神の言葉であって、私の言葉ではない》。「説教

後」神が私に言われる、「汝よく教えたり、それは汝によりて我語りたるが故なり」。自ら語った説教についてこのように言うことができない者は、説教などしない方がよい》(ハンス・ヴォルストに抗して、WA五)。

次に聞く会衆の心構え。説教が神の言葉であるなら、実はそれをアレコレ批評などできるわけがない。今日の説教はなかなか面白いとか、退屈だなどと、そんなことをイエス様にむかって言いうるだろうか。そういうことでなく、一生懸命聞くことである。心の耳を澄まして聞くことである。そして聞き終わって、ただ一言「アーメン」あるのみ。そのためにこそ耳がある。ルターは言う、《神がその言葉をよく聞かせるために、耳を与えて下さったということは、神の最大のすばらしき業である》(一五四四年の説教、WALCH 第二版一三)。

まとめ。説教、それは神の言葉である。すなわち説教のとき、イエス・キリストが私の目の前で語っておられるのである。



モリッツ・シュテター「ルター」(2016)より

## シリーズ「人間ルター」⑭

## 説教する人ルター

鈴木 浩



中川浩之・画

ルターの名著

## 『山上の教え』による説教

所員 立山 忠浩

宗教改革の発端となったヴィッテンベルクに二つの教会がある。ルターが一五一七年に「九五箇条の提題」を扉に貼り付けたとされる城教会、そしてそこから歩いて近い市教会（シュタットキルヘ）である。主任牧師はブーゲンハーゲンであった。ルターの同僚であり牧会者でもあった人物で、ルターの葬儀の説教者となった。しかし彼は、宗教改革の拡大と定着を願う領主たちからの要請に応えて、市教会を留守にすることがしばしばあった。一年半続くこともあり、留守中の説教をルターが担うことになった。その時に行われた連続説教が『山上の教え』による説教（『マタイ五〇七章』）である。会衆である民衆のために平易に語られ、実際の且つ現実的な内容となっている。

一例を挙げよう。「平和を造る人々は、幸いである」（『マタイ五・九』聖書協会共同訳）について、「ここでは、戦争をしてはいけないという具合に、禁じられているのではない」と語っている。「たとえ戦争をするに足る十分の正当性や根拠があっても、できるかぎり平和に向けて助けをし、勧めを与えるべきである」と説きつつ、万策を講じても駄目な場合には「領土と人民を守るために、防衛をし

なくてはならなくなる」ことを認めている。消極的にせよ防衛権の行使の容認である。日本のキリスト者の多くはこの言葉に戸惑うに違いない。

ではもう一つの「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けなさい」（五・三九）はどうか。隣人に暴力と損害が及ぶのであれば、それを防ぎ助けるべきであると語るが、キリスト者である自分自身はあらゆる打撃を覚悟すべきであると説いている。「私たちに罪を犯した者を赦しましたから」と、主の祈りを繰り返して唱えているキリスト者の覚悟を求めるのである。

激動の時代の説教は実に刺激的であるが、誤魔化しがない。我々の説教はどうであろうか。

\* 『山上の教え』による説教』の邦訳は、『ルター著作集』第二集五巻（リト、二〇〇七年）に収録されています。

（JELC 都南教会牧師、

日本ルーテル神学校長）

「宗教改革者」ルターは、事柄に即していえば、まずもって「礼拝改革者」であった。しかし礼拝はどう変わったのか。それまでの教え（実体変化の教理）によれば、礼拝の中心であった聖体拝領（聖餐式）では、パンは、イエス・キリストの「体」に変わったのである（聖変化）。パンはもはやパンではなく、文字どおり、マリアから生まれた「あの体」になった、というのである。「説教」は言ってみればその付け足しであった。無論、教会の伝統の中で、説教が軽視されていたわけではない。教会の歴史の中では、繰り返し、「神の言葉」を聞くことの重要性が説かれてきた。しかし、「実体変化」の教理が教会の公式の教えとなってしまうと、その教えの圧力が圧倒的に大きくなり、その分、説教の比重はずっと小さくなった。「イエス・キリストの体そのものを受け取る」ということと、「イエス・キリストについて語る」ということとは、体そのものを受け取るこの方

が、はるかに尊いことのように思われたからである。極端な場合には、かつて預言者が警告したように、「神の言葉を聞くことの飢饉」が起こってしまう危険があった。

しかし、ルターは「神の言葉の力」を何よりも強調したいと思った。神の言葉が、「今・ここで・あなたに向かって」語りかけているのだ、それも、「なきものがあるがごとくに」引き起こす「福音」（喜ばしいニュース）を力に満ちて告げ知らせているのだ。だから、説教は、礼拝の中で、とりわけ大切なのだ。

Deus dixit（デウス・ディクシット、神が語りたまうた）が二〇世紀の説教を変えた、と言われた。Nunc Deus dicit（ヌンク・デウス・デイキット、神が今語っておられる）が、いまルターにならう説教者の課題だ。

（研究所顧問、JELC 引退教師）



ドレ『山上の説教』(部分) 1866

# コロナ禍における福祉、臨床心理、教会 〜合同勉強会（第一回）報告

所員 宮本 新

ルター研では毎月一度所員会を開催し、そこで所員の発表を中心とした勉強会を行います。しかしこの所員会もまたコロナ禍の影響下でオンラインに移行、勉強会もままならぬ状態になっていました。しかし悪いことばかりではありません。かえって新しい企画を実行する機会が生まれ、一二月三日にルーテル学院大学教員有志とルター研究所の合同勉強会を開催する運びとなりました。福祉・臨床心理・神学と専門分野は異なるものの、いずれも人間を見つめ寄り添う観点は共通しています。コロナ禍のもと、それぞれのフィールドで何が起っていて、何を考え、どんな取り組みがなされているのか。共通の関心から互いの発表に耳を傾ける機会としました。

当日は始めに江口所長からコロナ禍における学際研究の可能性を示唆するイントロダクションがあり、つづいて福祉、臨床心理、そして神学から一人ずつ発表とそれに対する質疑を行いました。これといった条件を設けず、各発表者が自由にコロナ禍における現況とそこでの研究報告を発表し、終始和やかな雰囲気活発な意見交換がなされました。誌面の都合

上、詳細な内容を報告できませんが、はじめた所員会に参加し発表いただいた浅野貴博先生と石川与志也先生から当日の勉強会の雰囲気を感じられるメッセージをいただいています。

またお二人の先生方と並んでルター研からは多田哲研究員が「コロナ禍における教会」と題し、礼拝や諸活動の休止やオンライン礼拝の取り組みをめぐる考察を発表しました。神学とは本来、コロナ禍において直面した世界観や人間観の変貌にかかわる学であるとの問題提起があり、さらに本学の総合人間学 Integrated Human Studies が標ぼうするところと那点で合致することが指摘されました。この総合人間学を標ぼうする大学は国内でいまだ稀少であるものの、その総合とは単に専門知識の寄せ集めや、寄り合いのようなものであつてはならない挑戦的課題であり、同時に人間の福祉に仕えるものであることを指摘、大いに刺激的な発表となりました。

以下、浅野先生と石川先生からのメッセージを掲載します。

浅野 貴博先生（福祉／ソーシャルワーク）より

「コロナ禍における福祉」について話題提供しました。まず、高齢者や障がい者、児童等の幅広い対象を支援する社会福祉の現場では、対面での支援が基本ですが、慢性的な人手不足の中、三密を避けることが難しい環境での感染予防対策が重なり、必要な支援が提供できないという深刻な影響が及んでいます。また、コロナ禍は、社会的弱者と呼ばれる、社会の構造上、不利な立場に置かれている人々（例えば、非正規労働者や技能実習生；等）に対して、より深刻なダメージを与えています。

また、大学の教育、特に実習教育への影響として、文科省および厚労省からの通達により、実習施設等の代替が困難な場合は、現場実習に代えて演習又は学内実習等を認める方針が示されたため、多くの大学では、従来の現場実習を学内での実習に切り替える措置が取られました。こうしたさまざまな課題に対応するために、支援現場と教育・研究の現場における協働がこれまで以上に求められています。

石川与志也先生（臨床心理学）より

コロナ禍で、私の臨床は、一時期、すべてがスカイプか電話による面接にな

りました。物理的な場を共有できない相手といかにして心の交流が可能となるのか、試行錯誤の中で私が体験し、考えたことを、精神分析家ドナルド・ウィニコットの錯覚と脱錯覚という概念の視点から話をし、われわれが他者と出会い、心の交流ができるとはどういうことかを考えました。また、届く保証がない中で届くことを信じて語るこの意味についても言及しました。今回のルター研究所の勉強会に参加させていただいたことは、私にとって、大きな転換期にある私たちの社会において、社会福祉、臨床心理、キリスト教（神学／教会）の三つの領域が集まり語り合うことで共に創造してゆけるものがあるのではないかという希望を持つことができた経験でした。

今回の取り組みはコロナ時代のルター研の新しい試みとなり、次回の取り組みが期待されるものとなりました。

（ルーテル学院大学・神学校 専任講師）



ルター研究所棟

# ヘルダーの言語思想

所員 高井 保雄

ルターには「字句は死んだ言葉であり、発語は生きた言葉である」という言語観があるが、この思想を引き継いだ思想家の一人がヘルダー（一七四四～一八〇三）だ。実は先日、ルター研究所での研究会で、ヘルダーの名前がでた。若いころから注目していた人物である。そこで改めて学び直したいと思った。

彼は、若くして説教家、文芸批評家、神学者、そして言語学者だった。その名声を慕って訪れて来た若きゲーテに「疾風怒濤」の革新的文学精神を吹き込んだ話は有名だ。後にゲーテはワイマール公国の宰相となるが、その地の教会総監督として彼を迎えた。

一七七一年、ヘルダーは時のベルリンアカデミーの懸賞論文（テーマ「人間は自ら言語を発明できたか、また、どのように人間はその発明に到達するか」）に『言語起源論』を著して応募し、見事に賞を得た。

ヘルダーによれば、人間は神の被造物だが、言語は神から完成された状態で与えられたものではなく、人間がその魂に備わる「思慮深さ」をもって、まず聴覚、続いて視覚等を用いて継続的、歴史的に形成した「人間の発明」である。それ故

さまざまな時代の民族の言語もまた歴史的に形成される。

ヘルダーにおいては、歴史的な「言語の生成」は、歴史的な「人間の生成」を意味する。この人間学は、神学における古来からの「人間の神的似像性」の問題に対して、それまでのカトリック的な理解でもなく、また宗教改革の理解とも異なる、全く新たな「人間の生成し発展する神的似像性」という問題を提示する。このようなヘルダーの思想は、「現代の神学的人間学の論議にとって驚くべき意義を持つている」（パネンベルク）。

ところで、ヘルダーの『言語起源論』の邦訳書は、一九七二年原著出版二百年記念の時に二書、二〇一七年更に一書上梓されている。この出版事実、日本語の起源についての論議にも、本書の有する価値が今尚大きいものであることを如実に物語っている。（JELC 引退教師）



ヘルダーの影絵

## 新刊

### 『ルター研究』第一七巻 （特集・宗教改革と疫病）の紹介

ルター研究所の紀要『ルター研究』第一七巻が出版されました。「宗教改革と疫病」特集号です。中世末のペスト流行期を生きたルターの信仰と神学から、コロナ禍の私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。次の五つの論文が収録されています。

- ・【翻訳】ルター「人は死から逃れることができるのかどうかについて」（多田哲訳）
- ・宮本新「ルターの「ペスト書簡」を読む」
- ・立山忠浩「まことの礼拝」を考える
- 新型コロナウィルス禍の産物 —
- ・江口再起「コロナー人類・ルター・教会」
- ・石居基夫「ルターの「三重の秩序と立場の教え（drei Stände-Lehre）」と教会の宣教」

まず特筆すべきは、ルターのいわゆる「ペスト書簡」（一五二七年）のドイツ語原典からの完全訳です（以前は故内海望先生の英訳からの部分訳しかありませんでした）。ペスト蔓延の中、キリスト者はいかに生きべきかを説いた手紙です。疫病についての、最も重要な神学文献でしょう。五〇〇年前の文書の翻訳ですが、正確で大変わかりやすい訳文となつています。

宮本論文は、その「ペスト書簡」を論

じています。教会の指導者として牧師としてのルターが、疫病の不安の中を生きる人々に、改めて「信仰と愛」に生きることの意義を力強くまた深々と説く。そこには神が一人一人、全ての人に与えた務め（召命）がある、と論じています。

立山論文は、今回のコロナ禍にあつて、教会にとって大問題となった、今までのようにはふつうに礼拝に出席ができなくなったという事態を背景に、改めて礼拝の本質・あり方を論じています。その中で、イエスが語る「まことの礼拝」（ヨハネ福音書四・二三）の真意に注目しています。

江口論文は、今回のコロナ・パンデミックの人類史的意味、またキリスト教の歴史やルターから何を学ぶことができるか、そしてポスト・コロナの時代の教会の姿（「世の光・地の塩」）について論じています。

最後の石居論文は、コロナ特集とは別ですが、「三王国論」と並ぶルターの社会理論の二本柱の一つであるいわゆる「三機関説」を論じています。従来、わが国ではほとんど論じられてこなかったテーマですが、その基本的考え方を論じています。

いずれも力のこもった論文です。ぜひ、お読みください（なお、ご希望の方は、ルーテル学院大学・神学校 後援会事務局（Tel.〇四二一三一一四六一）まで、ご連絡ください。定価二二〇〇円＋送料です。）（え）

## ルターの ことば

JELC 事務局長 滝田 浩之

「あらゆる尊い善きわざのなかで第一の最高のわざは、  
キリストを信ずる信仰である」

(『善きわざについて』)

神学生の頃、「キリスト者としてどう生きるべきか」、「何をなすべきか」について悩んでいた。先輩の神学生たちは聖書を深く読み、神学を掘り下げ、さまざまな問題意識を持ち、そしてその問題意識に基づいた実践に生きておられたからである。そんな彼らに比べて「自分には何にもない」と打ちひしがれていた。

そんな時、ルターの『善きわざについて』という書物を手にとった。その中の言葉が、先の言葉である。ルターは「神が命じたわざ以外には、いかなる善きわざも存在しない。……善きわざは、わざの外観、慣習、人間の判断によって行ってはならない」と語った上で、「自分の行くところは神のみこころにかなうという確信が心があれば、たとえそれが、わらくず一本を拾いあげるような些細な事柄であっても、そのわざは善である」とも語る。

この言葉に出会い、神学生として今課せられている課

題をイエスさまから与えられている使命と思い、一つ一つ、丁寧に心を込めて生きることしかできないけれど、それをイエスさまは「善きわざ」として受け取ってくださるということを、実際の生活の中で自身の劣等感が解消されることはなくとも、一つの光として、神学校卒業、教職按手という目標を歩み切る力となった。

ルターが「キリストを信じる信仰」こそ、「最高のわざ」であると語る時、「わざ」としての「信仰」とは何であろうか。「わざ」とは「行い」である。「行い」としての「信仰」、それはルターが「小教理問答書」で繰り返し語るように「神を畏れ、愛し、信頼する」ことである。それこそルターは「最高のわざ」だと定義するのである。

「神を畏れ、愛し、信頼する」、牧師になってからも、この「わざ」は私にとって最も難しく、最も恵みに満ちた「わざ」であり続けている。



ルターの協力者のひとりに、画家ルーカス・クラナッハ（父）（1472～1553）がいた。ザクセン選帝侯の宮廷絵師としてヴィッテンベルクに招かれ、ほどなくルターの宗教改革運動の賛同者・協力者となり、ルターと親密な関係をもった。作品に多くのルターの肖像画があり、ルターの両親、ルター夫婦の肖像画もある。さらにルター訳聖書の挿絵も担当した。いくつかは過去に紹介した。

今回は、本紙のテーマに従い、2枚の聖壇画の切手を取り上げたい。目で見える説教である。いずれも父親が手掛け、同名であるゆえ複雑だが、息子ルーカス・クラナッハ（子）（1515～1586）が完成させた共同制作と考えられる。

小さいほうの切手は、2015年、クラナッハ（子）生誕五百年を記念しドイツで発行され、ヴィッテンベルク市教会の祭壇画の中央部にある最後の晩餐（聖餐）が図柄となっている。拡大鏡を要するが、左側ではイエスがイスカリオテのユダにパンを渡しており、右側では騎士姿のルターに画家自身（子）が盃を渡している。

二枚目は、第26回で紹介したものだが、宗教改革五百年を記念し2017年イタリアで発行された。図柄は、ワイマールの聖ペトロ・聖パウロ教会（通称ヘルダー教会）の祭壇画中央部である。十字架のもとに、洗礼者ヨハネと聖書を持つルターに挟まれてクラナッハ（父）が描かれる。頭に、キリストのわき腹から飛び散った血が注がれている。

## 切手に見るルター ③②

### 目で見える説教

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一





ルター

〈研究部門〉

「ルターとバッハ」を  
始めるにあたって



バッハ

切り絵：小嶋三義

ルター研究所で、「ルターとバッハ」の研究をはじめます。

よく知られているように、ルターは音楽と深い関わりがあります。ルターが生きたのは、五〇〇年前の中世末期ですが、当時の人々は礼拝堂に響く清い聖歌隊の歌声に、神の祝福の調べを感じていました。ルターはその礼拝の中に、会衆がみんな歌う賛美歌を導入しました。実際、ルターの作詞作曲の賛美歌がいくつもあり、今でも歌われています。ルターの礼拝改革のひとつです。

こうしたルターの精神を受け継いだのが、ヨハン・セバスティアン・バッハ（一六八五～一七五〇年）です。今さら言うまでもなく、バッハこそ西洋クラシック音楽の父ですが、彼がとてども熱心なルーテル教会の会員であったことは有名です。ライプツィヒの聖トマス教会の音楽監督をつとめ、誠実な信仰生活を送りました。また当時としてはめずらしいことですが、自宅にはルターの著作集も揃えられていたそうです。音楽の土台に、神信仰があつたのでしょうか。

と云うわけで、神学的にも音楽学的にも、「ルターとバッハ」は、とても重要な研究テーマです。ルター研究所でも、その研究に力を入れたと考えていました。実際、初代の所長である徳善義和先生は、ルターとバッハについて、いくつもの論考を残しておられます。そうこうするうちに機が熟し、二〇二二年度より研究所内に研究部門「ルターとバッハ」を発足させ、研究をすすめていくこととなりました。松本義宣先生（JELC 東京教会牧師、式文委員会長）、アンドリュウ・ウィルソン（ルーテル神学校講師、歴史神学）、加藤拓末（バッハ研究者、JELC 大森教会員）の三人に研究員になっていただきます。

また、わが国の教会音楽のパイオニアであった故池宮英才先生の諸資料が、このたびルター研究所にご遺族より寄贈されましたが（研究所ニュースをご覧ください）、信仰と音楽との関わりの中で、合わせて研究をすすめていきます。どうぞご期待ください。

（スエ）

研究所ニュース

新型コロナウイルス感染が、なかなか収まらない様子です。しかし、研究所の活動はむしろ例年にも増して着実に続けてまいります。

● 牧師のためのルター・セミナー

牧師を対象にルター・セミナーがウェブ会議方式で開催されます。五月三十一日～六月一日。テーマ「コロナ時代の説教と聖餐」です。

● 公開講座

二〇二二年度は、前期「ルターの生涯」（担当：江口）、後期「ルターの神学」（担当：江口）です。コロナのため残念ですが、今年の対象者は神学校・学院生に限定です。

● 研究部門「ルターとバッハ」

研究所の研究対象として、「ルターとバッハ」研究がはじまります。上段をご覧ください。

● 「ルター研究」一七巻発行

「ルター研究」一七巻を四月に刊行しました。本紙六面をご覧ください。

● 故池宮英才資料の寄贈

故池宮英才先生のご遺族より、資料・文書が研究所に寄贈されました。池宮先生はわが国における教会音楽の最大の功労者のお一人でした（JELC むさしの教会員、東京女子短期大学長）。ルターと音楽は深い関わりがありますが、今後貴重な資料を用いて研究をすすめていく予定です。

● 献金のお願ひ

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会（JELC）からの支援金（一〇〇万円）と皆さんのご支援（目標二五〇万円）で成り立っています。二〇二〇年四月～二〇二二年三月のルター研究所への指定献金は約九〇万円でした。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研究所）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

（所長 江口再起）

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三一一〇一

電話 〇四二二三一一四六一

発行責任：江口 再起（所長）

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp